それでも、まだ紅い意志は主自身を締め上げた箇所を緩めない。まだこの程度では駄目なのだ。もっと焦らして、追い上げられることをかれが望んでいるのだから。

奥まで入った柄がずるり、と引き抜かれる。唐突な刺激にかれの白い背がひどく反り返った。勢い良く再度貫く。

何度もその動きを繰り返す。かれの内部から零れ落ちてくる淫液に、水音が高くなり、動きが速くなる。打ち付けるような卑猥な音、行為から生じるとしか考えられないその音は、かれの聴覚を犯し、悶えさせる効果もあった。

極まった快楽に、水晶の雫のような涙を零し、かれは軽く首を振る。

柔らかな極上の絹よりも美しい髪が闇の中で揺れ動く。

一点をきつく押し上げ、同時に前を締め付けていた部分を緩めた。

絶頂の痙攣と共に、白い蜜が勢いよく飛び出した。

荒く上下する白い胸、首筋、呼吸を求めて開放を強請る口元。

それらに構わず、紅い意志は続け様に貫いて、引いて、を繰り返す。

精を放ったばかりの前のものもすぐに硬く力を持ちはじめる。今度は絶頂を止めることはせずに、緩やかな刺激のみを加え続けた。

一度目よりは穏やかな吐精と、痙攣が訪れる。

紅い意志はゆっくりとかれの咥内から先端を抜き出す。かれはほうっと大きな溜息をつく。そっと宙から身体が寝台へと降ろされる。

柔らかな寝台の上にかれは身体を沈み込ませ、呼吸を整える。

紅い意志はまだかれの身体に絡みついたまま。緩やかに紅い身を動かし、白い裸体を愛撫する。内腿に巻きついた部分にかれが反応する。

僅かに理性が戻ったかれが閉じようとする脚を許さず、ぐいぐいと奥へと潜り込む。中途半端なことではかれの本能が満足しないことを知っている。気を失うまで犯さなければならない。そして、予想通りにすぐにかれは甘い声を上げた。濡れた先端はまた、声を抑える為に、咥内へと潜り込んだ。

狭い内壁に逆らうように内部で暴れる。通常の交わりではありえない動きに翻弄されるかれ。締め上げられた前は先走りを流し、雄であることを明らかにしているのに、侵入された後ろはどろどろに蕩けて、受け入れる為の器官と成り果てている、浅ましい身体。

身体を捩じらせ、細い腰をくねらせ、淫らな踊りのよう。前への絶頂を強請って、触れようとすることを紅い意志は腕にも絡みつくことで止めている。咥内でも先端を動かし、胸元では蕾を弄り、腰に絡みつき、下腹部を這い上がり、後ろを犯し、前を刺激する。快感に直通する敏感な場所を一度に刺激されて、かれの思考は白くなる。

前の濡れた先端にも紅い意志は身を擦りつけ、敏感な箇所を愛撫した。

それでいて中々絶頂を許さない。

ゆるり、と唐突に前への刺激だけがとかれる。脈打つそれはそそり立ち、流れた液体で濡れた輝きを帯びている。あと少しでも触れれば弾けるだろう。

そこで、紅い意志は後ろに侵入した柄で中の一番感じる箇所を擦った。

同時に、迸る、白い液。闇を切り裂くように弧を描いて落ちた。

その後は、前は直接刺激せずに、胸や腰、首筋、大腿部を這い回り、後ろへの刺激を続ける。それでも、雄の証は萎えることなく、だらだらと快感の液を流し続ける。簡単に絶頂に迎えないだけに、炙られて敏感になる身体全体。表皮全体、そして、内の肉である、咥内や後腔がより性感帯として研ぎ澄まされる。

そうして、夜が更ける。

何度も後ろを抉られる刺激に痙攣し、前と後ろ、そして口から甘い蜜を流した。身体中どころか寝台までも蜜まみれにして、かれは明け方近く、ようやく意識を手放した。

細い月は沈みかけていた。